平安時代書写 和漢朗詠集 校異と研究［研究篇］

山本 まり子

平安時代書写 和漢朗詠集 校異と研究［研究篇］

山本 まり子

目次

はじめに……2
第一章　雲紙本と関戸本との関係（一）……6
第一節　雲紙本と関戸本との関係（二）……21
第二節　雲紙本に見られる別筆……45
第三節
第二章　伊予切の書に関する一考察……60
第一節　伊予切の書―粘葉本との関係―（一）……79
第二節　伊予切の書―粘葉本との関係―（二）……104
第三節　近衛本の性格―粘葉本・伊予切との関係を中心に―……123
第四節　伊予切の性格―粘葉本との関係を中心に―……145
第五節　粘葉本・伊予切に関する考察―雲紙本・関戸本との関係を中心に―……167
第六節
第三章　安宅切の位置……192
第一節　巻子本の位置……212
第二節　葦手本の位置……231
第三節　唐紙切の位置……253
第四節　戊辰切の位置……271
第五節　戊辰切の位置―書・書写内容に関する考察―……287
第六節　葦手本と戊辰切巻上の書……314
第七節　山城切の位置……337
第八節　久松切の位置……359
第九節　伝藤原行成筆大字切の位置……382
第十節　下絵切の位置……392
第十一節
結びにかえて……412
既発表の論文一覧……416
あとがき……418

はじめに

『和漢朗詠集』は朗詠にふさわしい中国・日本の詩文、和歌等が撰集されたアンソロジーである。撰者とされる藤原公任（九六六―一〇四一）は学才豊かな当代きっての文化人であり、この公任の撰による本作品が当時を代表する作品の一つであることに疑いの余地はなく、これを研究することは我が国の文化の基盤を理解する上でも極めて重要である。しかしながらその原本は現存しない。『和漢朗詠集』の姿を窺い知るにはその伝本（以下「写本」ともいう）に頼らざるを得ない。

『和漢朗詠集』は巻上（春・夏・秋・冬）、巻下から成る。百余りに部類分けされ、その中でそれぞれに立てられた題のもと、詩文・和歌等が採録されている。それらは中国・日本の詩文、和歌等の順に収められている。漢詩文・和歌の同列化はそれまでのアンソロジーには見られないことであった。漢字・仮名表記の併存によって書の作品・手本としても重んじられ、成立直後から頻りに書写されたことと思われる。また、他の文学作品に見られる本作品の引用状況から『和漢朗詠集』は当代のみならず後代においても多大な影響を与えた作品であると考えられる。

伝本にはいわゆる完本、零本、切（断簡）があり、それらを合わせると平安時代のものだけでも三十余種に上る。鎌倉時代に至っては、さらに多くの写本が作られている。中には原本が書かれてからわずか数十年後に書写されたと推される写本もあり、いずれも公任が撰した原本を探る上で貴重な資料である。またその中には能書家の手によるものが含まれ、文学のみならず、書（主に筆跡を指す）を研究する上でもその学術的価値は非常に高い。それらの諸伝本が翻字されたものには昭和十四年刊行の『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』がある。該書は『和漢朗詠集』諸伝本の集成がなされた唯一の校本である。

その後、『古筆学大成』・『和漢朗詠集切集成』等の刊行による古筆切の資料公開がなされ、当時に比してより踏み込んだ

調査・研究が可能な環境となった。そこで改めて調査を行った結果、先学の研究成果の中には誤謬・謬説かと思われる箇所、不明瞭な説明が存することが明らかとなった。今後、『和漢朗詠集』の研究を深めていくためにはそれらを見直し、検討を行う必要がある。本研究の目的は、収集、集成し得た資料をもとに『和漢朗詠集』の元の姿、及び時代の流れとともに変遷する諸相の一端を探ることであり、そのために伝本の実態を明らかにし、各伝本の位置付け、系統立てを試みることである。

以下、凡例を示す。

一、書写年代を平安時代に限定して調査した諸伝本・断簡等の概要は次頁の通りである（「出典」に挙げる資料名は主要なものに限る）。特に断りのない限り、掲載順・引用の出典等（略号・略称は除く）は『古筆学大成』第一三・一四・一五巻［平成2年　講談社］に拠った。

二、『和漢朗詠集』の当該詩歌句を番号で示すことがある。その番号は『新編国歌大観』に拠った。『新編国歌大観』に未所収の詩歌句については当該詩歌句の位置を示すため、「の次」と表記した。例えば「92の次」とは92の次に位置することを意味する。

三、翻字の際はその多くを通行の字体に改めた。判読が困難な場合はその箇所を「■」または「□」で示した。

四、本書中、指摘する本作品『和漢朗詠集』の各部の呼称、及びその概要については以下の通りである。

諸伝本のうち、巻上・下の冒頭にそれぞれ「目録」を有するものがある。「目録」とは「題」の一覧を呼称するものである。本書における「題」とは部類分けされた各詩歌句群それぞれの項目名を指す。なお、「題」には、例えば「子日付若菜」における「若菜」のごとく、小字にて付加事項が書されていることもある。それらを便宜上、「付項目」と呼称する。

当該詩歌句に関する題詞・作者名等がその末尾（行末）に小書きされている場合がある。それらを「注記」と呼称する。

五、粘葉本・伊予切を「粘葉本類」と呼称し、雲紙本・関戸本を「雲紙本類」と呼称する。

伝本名	伝称筆者名等	略称	略号	出典（主要資料）
大字和漢朗詠集切		伝行成筆大字切	行大	『古筆学大成』（平2　講談社）
雲紙本和漢朗詠集		雲紙本	雲	
関戸本和漢朗詠集切		関戸本	関	複製本（大8　槃礎堂）
雲紙本和漢朗詠集切		雲切	雲切	『古筆学大成』（平2　講談社）
粘葉本和漢朗詠集		粘葉本	粘	『日本名筆選』8・9（平23・24　二玄社）
近衛本和漢朗詠集		近衛本	近	
法輪寺切本和漢朗詠集	伝藤原行成筆	法輪寺切	法	『古筆学大成』（平2　講談社）
伊予切本和漢朗詠集		伊予切	伊	『日本名跡叢刊』（昭56　二玄社）
久松切本和漢朗詠集		久松切	久	複製本（昭35　便利堂）
安宅切本和漢朗詠集		安宅切	安	
金銀砂子切本和漢朗詠集				
唐紙本和漢朗詠集切		行金	行金	『古筆学大成』（平2　講談社）
唐紙本和漢朗詠集切		唐紙切2	唐2	
唐紙本和漢朗詠集切		唐紙切1	唐1	
巻子本和漢朗詠集		巻子本	巻	複製本（昭7　尚古会）
太田切本和漢朗詠集		太田切	太	
益田本和漢朗詠集切		益田本	益	
大内切本和漢朗詠集	伝藤原公任筆	大内切	大内	
下絵和漢朗詠集切		下絵切	下	『古筆学大成』（平2　講談社）
散書和漢朗詠集切		散書切	散	
和漢朗詠集切（一）			和1	
和漢朗詠集切（三）			和3	
金銀切箔切本和漢朗詠集			定金	
山城切本和漢朗詠集	伝藤原定頼筆	山城切	山	複製本（昭14　里見忠三郎）
大字和漢朗詠集切（一）			俊大1	
大字和漢朗詠集切（二）	伝源俊頼筆		俊大2	
和漢朗詠集切			俊和	『古筆学大成』（平2　講談社）
多賀切本和漢朗詠集	藤原基俊筆	多賀切	多	
大字和漢朗詠集切		定信筆大字切	定大	
戊辰切本和漢朗詠集（巻下）	藤原定信筆	戊辰切	戊	複製本（昭3　尚古会）
戊辰切本和漢朗詠集（巻上）	藤原伊行筆	戊辰切	戊	
葦手下絵和漢朗詠集		葦手本	葦	
和漢朗詠集切	藤原伊経筆		伊和	『古筆学大成』（平2　講談社）